

俳句美術館 第3回公募作品展

ハイクアート賞

受賞作の発表

審査員の紹介

池田澄子

「豈」同人・「船団」同人
句集・『たましいの話』『拝復』など。

小西昭夫

子規新報編集長、愛媛新聞文芸特集
「俳句」選者。著書に『花綵列島』『ペリ
カンと駱駝』『小西昭夫句集』等。

富士真奈美

超結社句会参加・句歴四十年
俳壇賞選考委員
句集「瀧の裏」「てのひらに落花」など。

松本勇二

愛媛県現代俳句協会会長
海程同人・吟遊同人

八木 健

俳句美術館創立名誉館長
滑稽俳句協会会長
八木健のCATV俳句主宰

受賞者の発表

大賞



野球の子去りてたんぽぽ位置に着く

久松久子

【講評】 たんぽぽを擬人化。作者はたんぽぽの友人の気分なんだろう。野球少年たちに踏みつけられて小さくなっていたたんぽぽに平穏が戻った瞬間の状態を安堵し「定位置」と表現して巧み。野球少年を非難しているのではない。

特選



街中に枇杷鈴なりの分離帯
堀口孝子

【講評】

面白い風景を見つけた。街の中、しかも分離帯。枇杷鈴なりとは飽食の時代を象徴する。このような風景は日本だからこそ、某国では一夜にして枝ごと持ち去られる。決して経済だけでない日本の心豊かな風景を賛美する。



恋文をねずみに託す猫の恋
満喜恵

【講評】

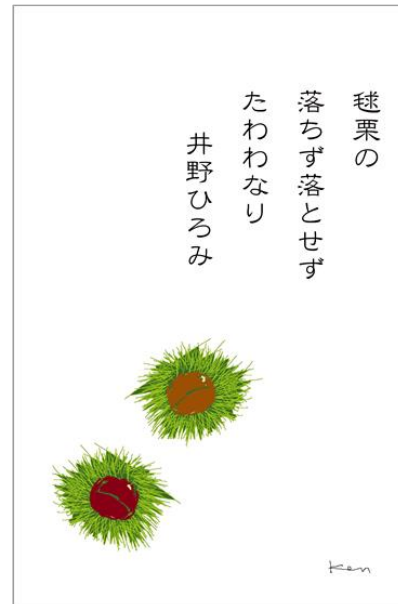
かつて猫の食糧だったねずみ。だから猫はねずみにとって宿敵のはずだが、猫がねずみを捕らなくなって、時代が変わったのか、激しい「恋の猫」は宿敵だったことを忘れてしまったのか。いろいろに読めて楽しい句である。



星々の集ひし夏のコンサート
久我正明

【講評】

満天の星を見ていると、その瞬きがお喋りをしているようにも楽器を奏でているようにも見える。星々を演奏者としてではなく演奏会の聴衆と見ることもできる。大悠久の自然の壮大な営みは見る者をロマンの世界に誘う。



毬栗の落ちず落とせずたわわなり
井野ひろみ

【講評】

悔しさも句になる。作者は恐らくたわわな栗を竹棒で叩き落とそうとしたのだ。「落ちず落とせず」に必死に竹棒を振り回す声が聞こえてくる。句末のたわわなりは、結果描写は完敗でしたと言っているようにも読める。



秋空へ奏ぶ打楽器管楽器
藤岡蒼樹

【講評】
野外での演奏を描いている。「秋空へ」の表現には音の広がりが出てくる。打楽器の重々しい響きや軽快な乱打、管楽器の響きの輝き。それまで室内に籠ることを余儀なくされていた打楽器、管楽器は作者自身でもあろう。



離れゆく子等の早さや鯉幟
山口 徹

【講評】
鯉幟と取り合わせて面白い。つい先日まで手で叱ったり甘やかしていた子らが春三月の巣立ちで遠方へ遊学したり、就職したりと去ってしまった。鯉幟を喜ぶ子らはもういない。歳月の迅速を吾子との対比で描いた。



コンサートホール出づるや青嵐
川島智子

【講評】
コンサートホールは隔離された別世界だから、出た途端に世俗だったり、自然だったり演奏会で味わったものとは異なるものに出会う。作者が出合ったのは「青嵐」だ。ひよわな者には厳しい風、それは世間でもある。



白昼の夫婦喧嘩や金魚玉
山口 徹

【講評】
金魚の雄雌が争っている。白昼の夫婦喧嘩といえる。ところが「や」で切っているから夫婦は人間かも知れぬ。少々太り気味な



藪で虫林で鳥のコンサート
名護の又三郎

【講評】
俳句は、すでに誰かが句にした風景を詠んでもつまらない句になりがちである。多くの読者が体験済みの作品だからである。



結界に口ぱつくりと栗の毬
氏家頼一

【講評】
結界は聖なる世界と俗の世界の境界である。毬栗は毬を開くことでその実を俗にさらした。「ぱつくりと」には多少の後

のだ。夫婦のどちらかが餌をやり過ぎで夫婦喧嘩になったとも解釈すると面白い句となるのだ。

誰も詠んでいない詠みにくい風景を見つけ 悔と諦めが。聖と俗をこれほど見事に一句にして共感させたか、驚かせたか 描いて季語が動かない。毬が強靱だからこそ聖なる実は驚く。

審査員賞

池田澄子賞



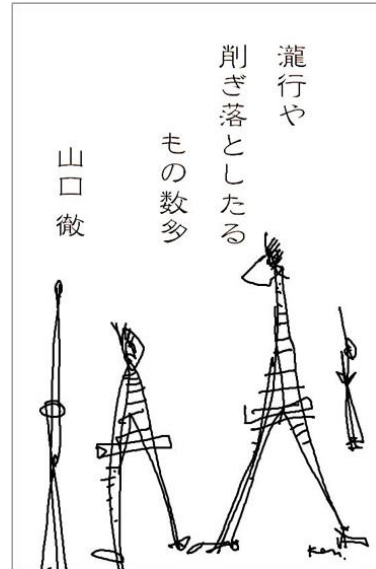
かまきりや脱皮跡にも威かくする
満喜恵

【講評】

俳句をオモシロイ！と感じるのは、作者本人が面白がっていないで大真面目な場合が多いです。この句、「跡」でいいか、威嚇は「威かく」でいいかなど問題もありますが、作者が本当に驚いているようで嬉しい。

(池田澄子)

小西昭夫賞



滝行や削ぎ落としたるもの数多
山口 徹

【講評】

絵と俳句のコラボの面白さは、絵が俳句の説明になったり、俳句が絵の説明になっていないことである。まず、この絵から「滝行」が出てくること自体が意外であり新鮮である。絵に新しい読みを加えた魅力である。

(小西昭夫)

富士真奈美賞



胸開きのワンピース着る案山子かな
久我正明

松本勇二賞



指揮棒に体をあづけ風光る
藤岡蒼樹

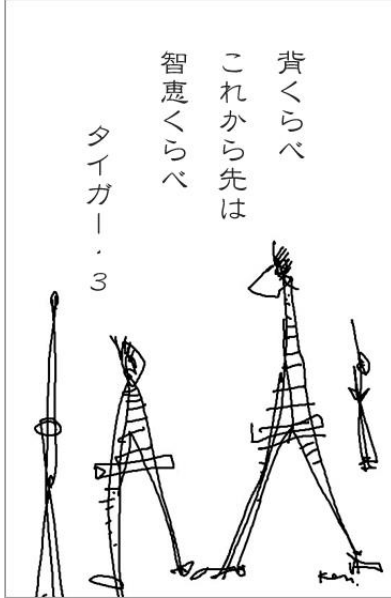
【講評】

もうお役ご免のマネキンが案山子になったのか、いえいえ作者の案山子は、へのへのもへじ一本足のカカシ。胸開きの大きいワンピースこそいい迷惑。なんで私ごと、今日も田んぼで嘆いている。畑違いとはこのことだわ！
(富士真奈美)

【講評】

体を預けたのが指揮者か演奏者か観客なのか見えてこないが、演奏者として取らせていただいた。指揮棒にシンクロナイズしてスイングする演奏者の映像が見えて鮮明だ。それらを受けた季語、「風光る」が一句を明るくさわやかに仕立て上げた。(松本勇二)

八木健賞



背くらべこれから先は智恵くらべ
タイガー・3

【講評】

背くらべしてる頃には無邪気が通用。「これから先」はそういう時代を卒業する段階である。これから先は「甘え」が許されぬ。身長だけでは勝負できない。智慧がモノいう時代なのだ。これから先の知恵くらべが大切。

(八木健)